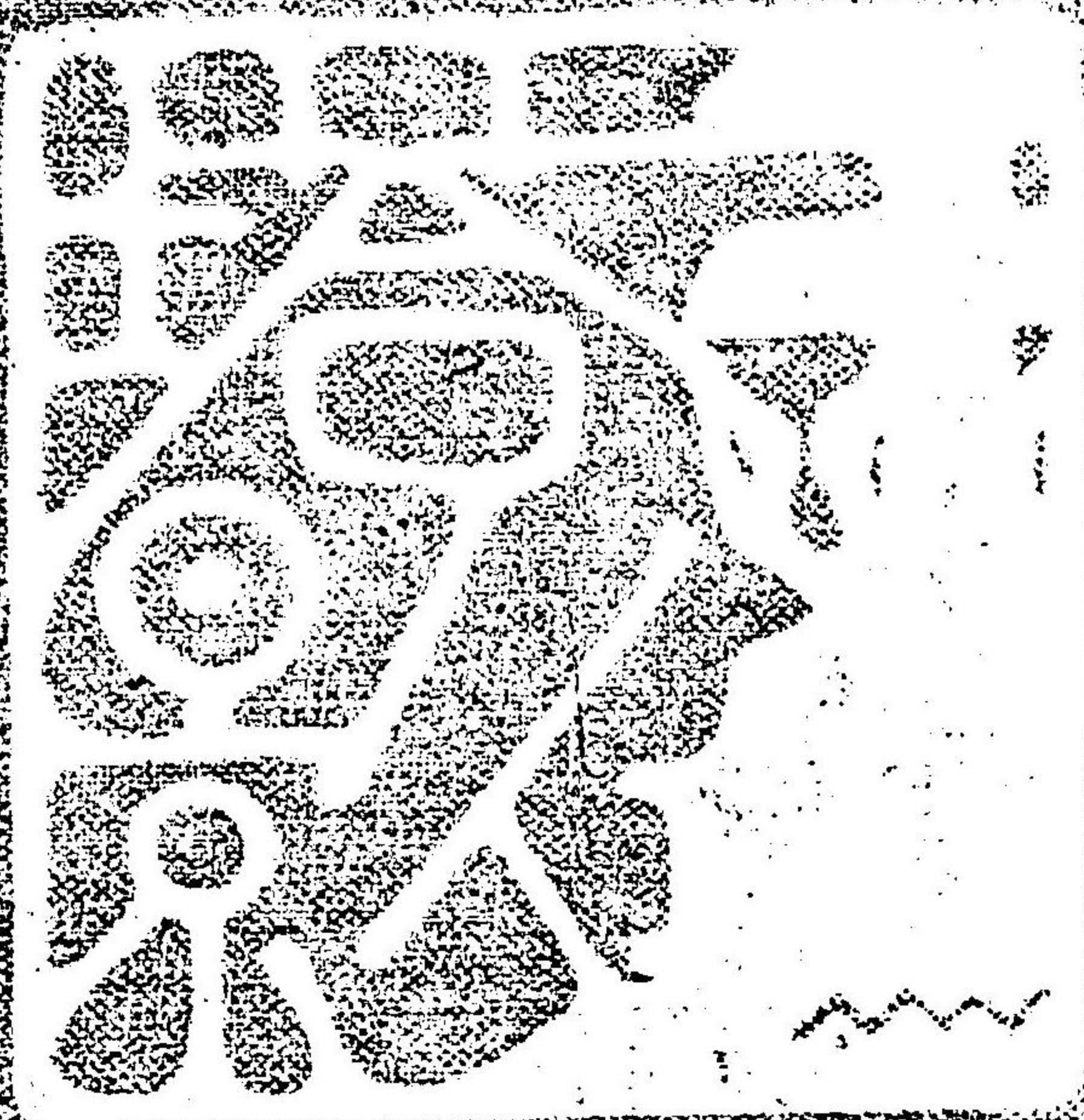
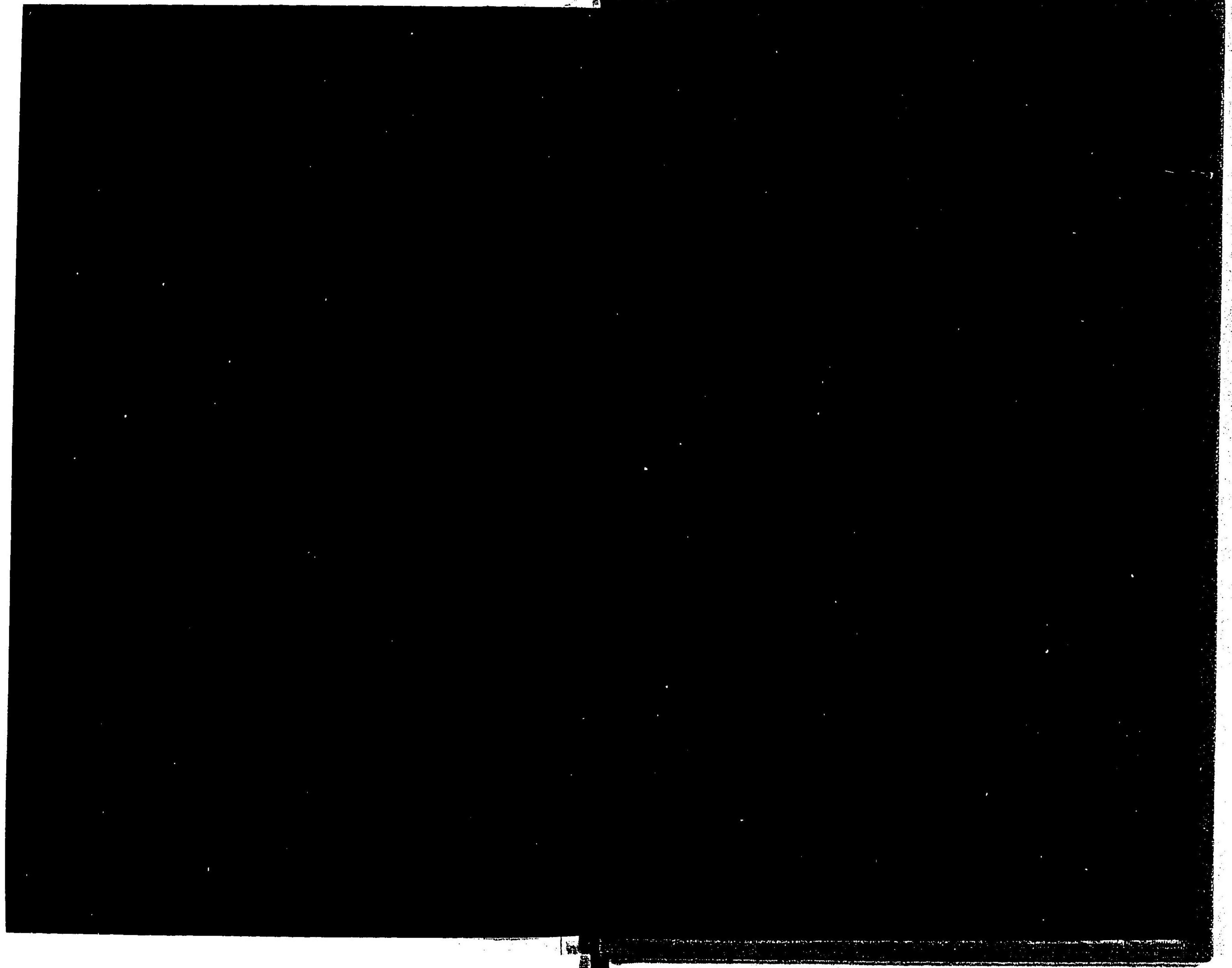


4668





特22
306



影

醉
茗
作



わが第二の故郷、大
和の山河に神鎮まれ
る古詩人の靈に捧ぐ

目次

塔影	一
天の高市	五
庭燎	八
破れし譜	三
はてなき森	六
仙媛	九
のろひ	三
失せたる針	五
汀のいのち	六
うまづち	三

戀物語……………三四

白き矢……………三七

鶴……………四三

繪師の後ろに……………四四

杳手鳥……………四七

温室の花……………五〇

稚子の夢……………五四

薄暮……………五七

銀河を讀む……………六〇

書ける琴……………六三

菩提樹の蔭……………六六

山守……………七〇

都の富士……………七五

吾心は暗し……………七六

萎める百合……………八〇

眠らしめよ……………八二

雷鳥の歌……………八五

彼は家を失へり……………八八

詩災……………九一

茶汲女……………九三

寺の鐘……………九六

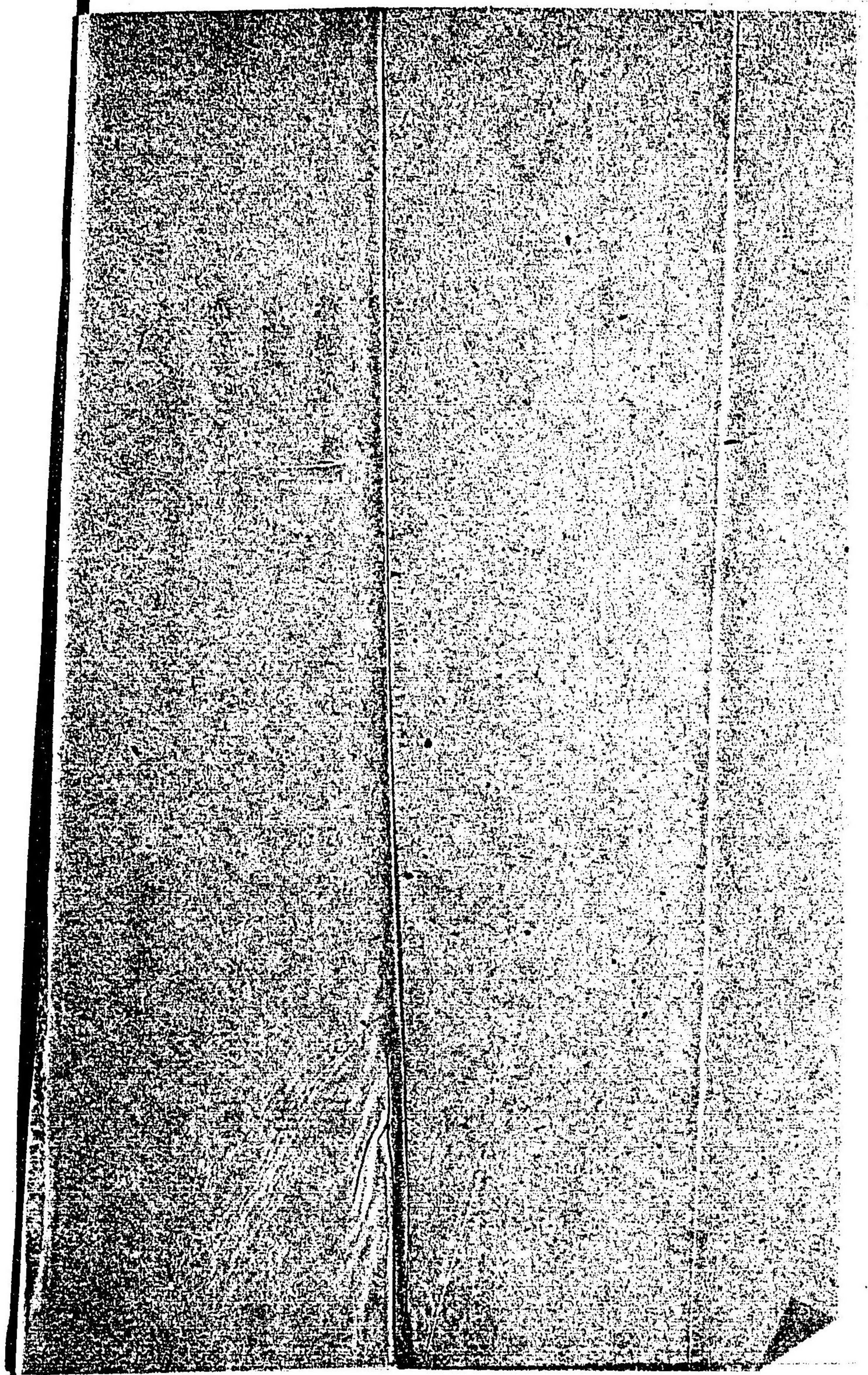
靈芝……………九九

夕立……………一〇三

葛城の神……………一〇六

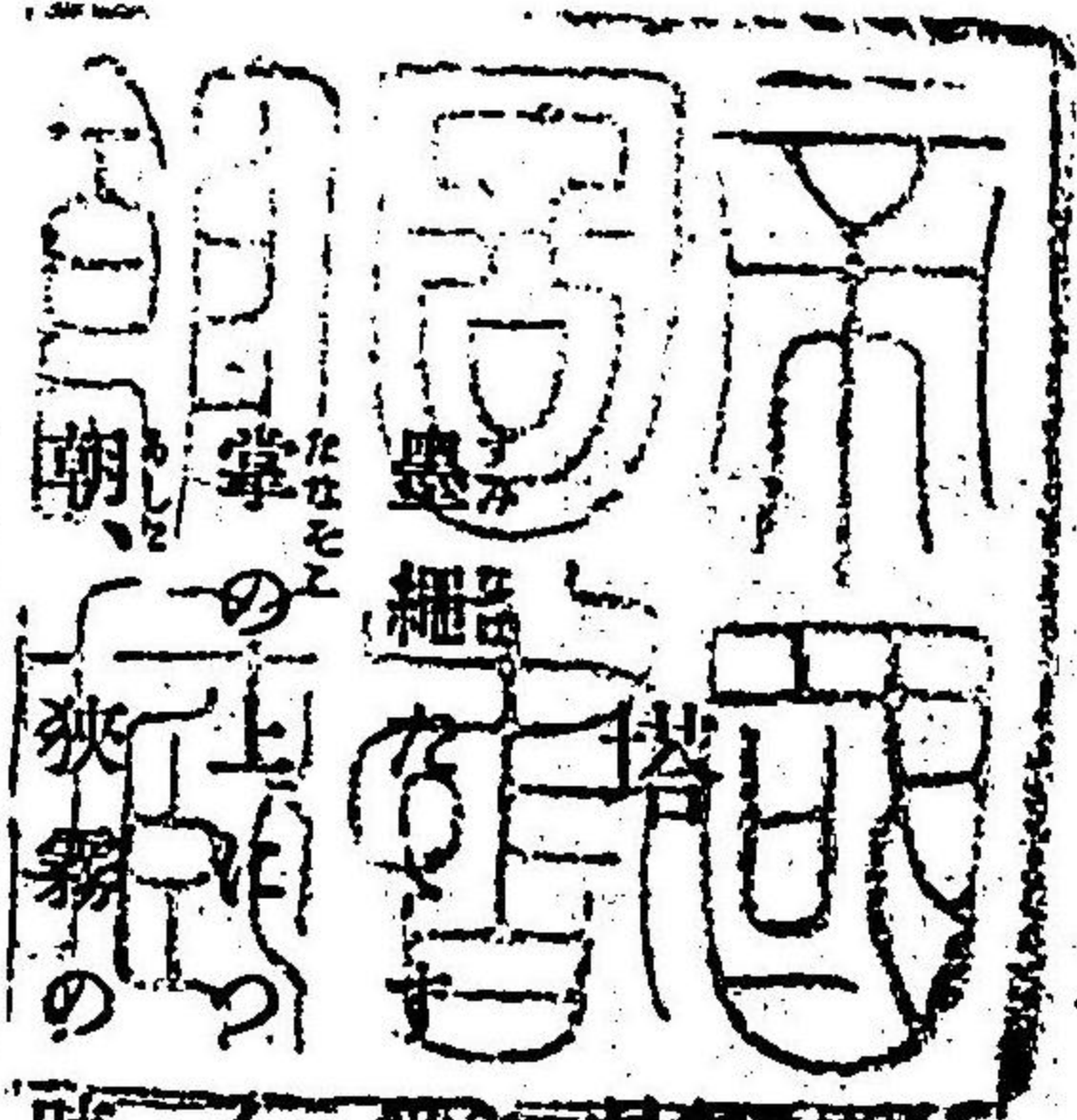
歌の故郷	一〇九
初めの謎	一一三
刻める名	一一五
野の歩み	一二八
都に歸りて	一三一
人影	一三四
巷の木枯	一三七
さむ空	一三〇
都はづれ	一三三
晴たる家	一三六
斯る人に	一三九
萩の若葉	一四三

さくら	一四五
母が奏づる	一四八
内裡雛	一五一
林檎を植うる歌	一五二
行く春の海邊に立ちて	一六四





塔影



影

番匠が

くられて

晴れゆけば

寶珠を天に捧げ持ち

岸に聳ゆる五層塔

藏めし經も盡みて

河井醉茗

供養忘れし末の世の
雲をさへぎる勾欄に
清き匏の痕見れば
塵に氣韻も残るかな

秋は露盤に露うけて
扉は神秘に閉されぬ
四天の神に守られて
金輪際に根を埋め
夜は北斗をうかへり

家に住まざる山鳩の

巢くふに處、得たればか
虚空、杳かに翔れども
畫棟の朱の古びたる
浮圖を慕ふて歸るらむ

落暉は西に傾いて
五重の屋根の歴然に
重なりうつる草の上
月は廂に浮び出て、
九輪の影は水に在り
雲の崖より吹落ちて

風、湖を拭ひ去る
波の面に刻まれし
藝術の花に咲きちらふ
時の力の遠きかな

その世に媚びし歌反古は
暦の嵐に破れたり
生命の岸を下に見て
天に呼吸する塔の
高さ姿を水に見よ

天の高市

大和の土は踏むとして
詩ならざるはなかりけむ
男郎女咲く香具山に
寧樂の詩人の隠れてより

幾久しきにわたりたる
神代の月は飛ぶ鳥の
明日香河原に影さびて
寧樂朝も遠くなりし哉

盛り過ぎたる藤原の
館の跡に秀てたる
稻の穂先を摘み取るも
谷めん人はまれらなり

天の高市に神ならぬ
人寄る市は榮ゆれど
初瀬未通女も久米の子も
古き韻は忘れけり

それ天平の鑿の香を
樹立がくれの古殿堂に

慕ひて行けば西のはて
希臘、羅馬に入るが如

詩に雅樂に彫刻に
美の淵源を興したる
氏ある子等は神去りて
國拓けたり露うるほへり

庭燎

庭燎を焚いてはふり子の
神を諫めし昔より
樂と舞とは伴ひて
時代の手ぶりを失はず

年の始めに禁庭の
御門に参る國栖奏
鳳笙未だ來らぬに
笛は自然の譜を傳ふ

富士の天女か傳へたる
東遊は滅びたれ
山の歌垣の面影は
文月なかばの鄙に見む

名のみ残れる雅樂寮に
伶人、樂の書を秘めて
催馬樂うたふ風流も
假名に残る語りぐさ

國に千古の樂あれど
響の末は衰へて

現代、強く新しく
弓弦張らむに人を見ず

金字の塔の壁の上に
古き楽器は繪のみにて
流れ去りたるものゝ音は
ナイルの岸に止まらず

神の戦に用ゐけむ
リールの絃は絶えしまゝ
後に繋ぐを忘られて
西に久しき世を経たり

雲を仰いでつくばふに
空より寄する大海の
浪のうねりは真砂より
胸の潮に傳はらむ

光と闇ともたらする
翼の音は聞きながら
樂手の指はいたづらに
あらぬ空音を探りつゝ

何を苦しむ、古の

自然にかへれ、樂の人
春は若きに疾く行きて
聲の扉を聞かざる

破れし譜

天の材を抱いて
若き樂師は逝りぬ
世の絃に傳へざる
彼の譜は破れたり
名手の笛に入らず
佳人の琴にのらず
自らつくりし譜を
彼は抱いて行きぬ

良き地は眞清水の
湧き出る水を呼ぶ
秘曲は人を俟つて
さぐる緒に韻あり

樂手二十四人の
合奏せ得たる調も
一絃の星落ちて
さびしきを想はずや
小波のうねりなす
響のゆくへ逐ひて

消えし如歸らざる
彼は聲にともなへり

樂は人に生れて
樂は人に埋まる
誰か破れたる譜の
全きをしらべ得む

はてなき森

若き子を導き入れて
鳩は梢を放れたり
誘はれし途は忘れて
踏めば小草の柔かき
檜葉杉葉、重なり覆ふ
森の光はにぶくして
幻覺のありとや見ゆる
瞳の色のかゞやきに

睡氣なる合歡より出て、
葵にうつる紅の
花瓣に觸るゝと見えて
胡蝶の舞のたわいなき
想ふこと袖をかへせば
高き壁の花となり
花の香の酔より覺めて
涼しき風の葉に起る

一葉、一葉撒くや木葉の
手に盡さむ日は限るとも

何處より背を向けて
引返すべき途あらむ

雛鳩に導かれたる
美しくしき子の顔あげて
幻覺を踏み迷ひ行く
森の深さは、はて知らず

仙媛

木の實を拾ひ草を掘る
仙童の影は棧の
八谷の末に消えゆきて
森に木傳ふ山鳥の
七彩の尾の美しくしき

萱の庇にゆきかよふ
尾上の雲は地に下りず
天津風吹く岩角に
國土は見ゆれ人の世の

波うつ響も聞えこず

あけぬくれぬと父の前

父より外に交らはぬ

隠家ながら互みく

かやく睡見交して

少女となりし姉妹

離れ小島に種子落ちて

香ある木も生立たむ

神はたまぐめぐし子を

みそら近くに召寄せて

塵の裡にや返さる

只かたあしも山を下りず

生れながらにしな高く

ゆたなる胸のおほらかに

眉根すゝしき面影の

仙媛とこそなるべけれ

のろひ

空洞に隠れて蟲物する子
森を歸るや咒の石を
二つに割りて其かた／＼に
罅入れむ斧を神に乞へり
型に塑れる眞白き蠟を
燃ゆる火の上に溶けんを待てる
少女の目見に嫉妬は見えて
白き烟は肩にまよふ

咒ひと云へば蛇をおもひ
蛇と云へば小瓶をおもふ
誰か小蛇の成態を忌みて
光澤よき瓶を碎くに堪へむ

咒文の歌の只一くさり
千載、祟を家に傳ふ
家の棟三寸下ると云ふ夜
幻影にして立つ人あらむ
魔厭のものに煽らるゝとも
知らで、ねたみの罨に落つる

素より愛の力なるを
永劫、神はこれを審判かず

失せたる針

なかの妹、小袖縫ふと
黄昏いそしむ解衣の
衽、下襦、膝に亂れ
熱れたる針を失へり
夕は迫る壘の上を
はした女をさる探るひまに
おぼつかないの光もてる
小さき針は隠れたり

末の妹、闇に怖ぢて
高く灯をさげたれど
姉は靜かに人を退け
刺されし胸を壁に向ひぬ

皿に落ちたる繪具の滴
美しき輪をつくる如
針吸ふ胸にほひありて
いたみに湧くか清き潮

ねよげに見ゆる末の女に
なに疑惑の眉や曇らむ

衣、新しく裁ち縫へど
失せたる針は姉に返らず

汀のいのち

笛に吹く子も来ずなりて
秋に折れたる葦の葉の
穂に出で、こそ寂しけれ

蔓には葛もなやめるを
わりなく纏ふ烏瓜
危うき崖にさがりけり

梢は色を水に映し
根はくはし女の魂を抱く

常盤樹、枝を空に張り
聲美き鳥は鳥を呼ぶ

毬葉は自然に弾かれて
人に落ちたるさゝ栗の
新たに甘き秋の實も
冷たき水に流れ去る

時間の小川に沿ふて行く
愛は水泡の戯れか
率都婆の文字は探らずも
戀は水際のいのちなり

裾のさゝ波、縁を取り
袖の小草は花を織る
岸の率都婆の暮冷を
秋や衣ころものうすからむ

つまづき

旅ゆけばこそ許すべき
うまし少女と會ひにけれ
路もそゞろに宵暗の
我家に近き冬木立

星は梢に蒔きしごと
影まばらなる枝越に
透いて見えたる燈火は
我育ちたる高さ室

語るはづみに瓜先の
木の根、少女の躓いて
あ、とよりかゝる肩の上
人の重みのあたゝかさ
血は内にもみ狂ひ湧き
行かず動かず呼吸せざる
石像、我が暫くは
吸呼の香の微かなり
そゞろ心に導かれ
初めて踏みし細道の

近しと聞いて今更に
あかるき家や耻らひし
戸に入る前に傷くは
吉からぬ兆と人は忌む
胸さき騒ぐたぢろぎの
次の投矢を危ぶみぬ
血にじむ指を強結ふ
手のをのゝきを慰めて
旅より歸る戀の猛者
俘を袖にかくまひぬ

戀物語

櫻の枯葉すべり落ちて
庇外れに雲の動く
朝の襟のみだれたるまゝ
戀物語、二人して讀む

肩にしぼりし袖の端に
髪の匂ひのこぼれたるを
寄添ふ人の指にまきて
ページ翻すを忘れたりな

柔の房を細く吹いて
うかゞひ來る夏の風の
何を現在に返し得べき
詩の國に行く興のなかば

昔、さゝやく人の聲を
迎りて行くに現し身より
影のはなれて木葉がくれ
美しくしき實を球と探る

巖しぼりて清水うけん
清き甕こそ胸に持てれ

むつぼゝれたる筆のあやも
二人して解く遠き味あぢはじ

白き矢

彼、たゝかひの野に立ちて
智慧の楯こそたのみたれ
愛の一矢に射ぬかれて
彼はもろくも倒れたり

傷ある者よ、よみかへれ
愛の御神みかみの前に立たば
美しく又あたゝかく
いたみを包む衣きぬをたまふ

母呼び返す急なるも
 愛の鎖に繋かれて
 甘き實結ぶ森に入らば
 なに歸るべく夢みんや
 火を噴く山の燃ゆる如
 火を噴く山の休む如
 熱き冷たき明暗の
 迷ひは戀の命かな
 湖のごと静かならば
 胸乳の下や寒からむ

あつき眼の輝きに
 美しき影や映らざる

レモンの花の眞盛り
 の
 高き薫に酔ひ惑へ
 捧げよ男女、賛とならば
 神、美しくしき戀を造る

星ことごとく消去るも
 愛は少女にかゝやかむ
 胸に開かば姫百合の
 花おのづから白からむ

快樂の外に時を持たぬ
 テオスの詩人、酒に酔ひて
 戀ならざれば使せぬ
 鳩を高さに放ちたり

愛の翼を動かせて
 翔るは戀の國ならむ
 射て落さんと人の子の
 白き矢、番ふ弓弦かな
 愛を魔の手に奪はせて

冷かに行く強き子よ
 枯野に返れ、戦はむ
 暗さに落つる墓はあらむ

鵲

わが尖りたる矢よ速に
翼を縫ふて地の上に落せ
戀の焔の畝をひろげむ

わが放ちたる音なき矢に
翼縫はれて地に落たる
戀の使は鵲なり

天の河原に星を渡す
橋つくりては何處に行く

御階の下か、筑の山か

庭に立てたる箒の絃を
鏡の面にうつし見れば
鵲、裏に身をかくしぬ

わが矢は折らむ
飛去る勿れ、鵲よ

繪師の後ろに

繪師の後ろにうかゞひて
黄金の羽はねの一筋を
肩の上よりそと投げて
胸に落ちしをほゝゑみぬ

繪師の後ろにうかゞひて
古代の筆を野の川の
せゝらぐ如く微かほかなる
遠きしらべに奏てたり

繪師の後ろにうかゞひて
まだ生れざる詩人うたひの
蒼の底にかくれたる
新しき句をうたひ出づ

繪師の後ろにうかゞひて
自然の上を司る
星の姿の美しく
呼吸かたひ静かなる香かほかな

繪師の後ろにうかゞひて
香かほある葉はに飾りたる

冠を高く捧げつゝ
頭の上に載せんとす

後ろに神の力ありて
影映るとも知らざれば
繪師は快樂を描きたる
吾繪を前に仰ぎたり

沓手鳥

薪樵るとて冬山の
朽木の虚に見出し
骸のやうなる沓手鳥
薄き絹裂く一聲に
天の銀河を横切りて
鋭き鳥は去にたるを
今、蜘蛛の圓に封じられ
翅すくめてみじすがず
森に天斧の痕なくば

柚は妄りに入れざらむ
ものゝ命を憫みて
樵夫は山をなつかしむ
たま／＼小さき鳥のはて
何の氣もなう一束の
霜枯草に覆ひ置く

再び繁る草木の
地の上青む夏は來て
天地の弓に張りつめし
季候てふ聲の勢より
よみかへりたる沓手鳥

蒼空指して翔り去る

幹も倒さず根も堀らず
朽木の虚も其まゝに
小禽の骸のありぞとも
はたあらずとも思出でず
樵夫、純撲に忘れけるかな

温室の花

冬、外を吹くから風は
人の面に冷きも
温室、草はいきくと
燃ゆるが如き花咲けり
光線と熱の強き野に
力籠れる花なれば
自然の森の奥に入り
探る恐れを忘れしむ

巖のはざま木の虚に
土を離れて根を下す
蘭は大氣に養はれ
高き馨の凝ると云ふ

物に象る繪工は
珍らかなるに驚いて
良き花守の眼を儼み
苔のまゝに摘去らむ

美童、汀をさまよひて
水に映れる花影に

歩み外せしエーカリナ
アマゾン河に盛りなり

花の白きは信仰の
神の豫言をもたらし
天のにひうた高呼ばふ
聲は清さにぬさんづる

地を僅に離れたる
うす紫の胡蝶草
花の香に蒸す一室の
風は翼に納めたり

笹、紅白の縞を織り
木葉、真紅の色を染む
谷這ひ渡る蔓草の
花は垂れたり長さ房

南の洋に漂ひて
人なき島に上るごと
重き木實を轉ばして
まばゆきばかり花に酔ふ哉

稚子の夢

そらに きみの こゑを きけり
むねと むねと かげと かげと
そらに あひて こゑを きけり

たびの ひとの みては かへる
ふるき かべに うたを のこし
きみと ともに そらを あゆむ

ふかき もやは ゆくに ひらけ
うみは とほし しまか やまか

うごく ものは みえず なりぬ

きしと きしの はやき しほを
およぎ こえし こひの もさは
ひとの くにの ものに みえぬ

われら ふたり いかに はてん
われの すがた くもと きえて
きみは たかき ほしと なるか

そでは まどひ おひは のろひ
ひとの きぬを とみに ぬぎて

きみは ちさく ちさく なりぬ

ちしを さがす ちごの ごとき

きみを だけば わがて かるし

まこと こひは ちごの ゆめか

薄暮

薄くらき 壘の上に

落したる 簪白 薔薇

黄昏を 拾ひもさして

吾想ひ 衿に 埋む

躡るなら ひととなりて

古き 柱、人になづきぬ

知らず、吾亂るゝ袖を

ほの白き 手に 押へたり

幻覺を胸に映して

吾想ふ世をこそ描け

待たばとて徒らなるを

少女の身、朽ちむは惜しき

行く水に影逐ふよりも

吾岸の小草に酔はむ

吾肩に人、手を下し

撻たば静に避けむ

堪へかねし白日の愁も

つり忍草静に暮れて

ゆふべく、眠らぬ夢の
うすやみに燭火なつけそ

『銀河』を讀む

月はみそらに生れたり
君、地の上に生れたり
まびさしあけて仰がんに
光は胸を射透さむ

靈ある山はふところに
よき湖を抱きたり
神の文箱をそとあけて
人、山水をわたくしす

狩場の裾野駿河の海
雪よ雲よと仰がれて
姫なる神はもどかしく
呼びたまはんをのぼれ君

小さき富士を手に撫て、
山王山の森かげに
詩をあざやかにいろどらん
雲の繪卷の紐を解く

世をわらんづに踏しめて
あとみかへらぬ旅の子の

姫鷲からむ岩角に
裾こそ裂いて歸りたれ

花か匂に足りぬとて
夕山百合に頬はふれて
日記に洩れたるひめ言の
戀は袂にかくしたり

畫ける琴

雲珍らしき埃及の
夜の北風によみかへり
朝を迎ふる音樂の
聲は山河にこだまして
美の民、國を創めたり

四絃、六絃、十二絃、
二十二絃のいづれかの
樂座に立てる「アルプ」手か
絃にふれたる力こそ

沙漠の空にみちわたれ

ナイルの河の河上の
水ゆたかなる岸にして
弓なす根をや張りにけむ
樂器を造る良木は
さびしく寒き地に生ひず

芭蕉しほるゝ白日の
乾ける空に奏てしか
水は溢るゝ廣漠の
うるほひの野に傳へしか

樂は「自然」に歸りけり

國亡ぶれど少女子か
髪にいたゞく水甕の
古き形を存す如
古塔の壁に書かれし
絃の緒ごとに慕はるゝ哉

菩提樹の蔭

河口慧海師に

山川草木ことくぐ
佛性ありと傳へたり
授けられたる靈ありて
人は神秘を味ふに
深き疑懼や抱くべき
それ信仰の偉大なる
虚空に浮ぶ須彌山の
高さも胸に仰ぐべく

曉ひらく白蓮の
花、自ら力あり

恒河の上に溯り
其源を知る如く
幾千年に流れたる
宗教の源泉を究めんと
君や豫てのちかひなる

下りゆく世の宗教は
西に東に衰へて
懷疑の霧は深かるに

獨り境界を外に斷つ
佛の奇蹟はありと言ふ

みそらを駆る天馬ならて
うかゞひがたき西藏は
實にや千古の雪に閉ぢ
法を護るに天然の
地の頂上を占め得たり
戒を持するに嚴しうて
仙骨、鶴に似たるべし
法衣の袖の飄然と

佛陀の國に止りて
御經や誦せし菩提樹の蔭

山 守

其初めより荒たへの
落葉衣に膚はなれ
溪の清水を湧かすとして
檜、樟、焚きてだに
住めば住みぬる山の奥
四十八谷を越えざれば
世に出て難き山かつの
山にはつるは恐れねど
入るさの月のしらくと

残んの夢のあはくとし
禽には禽の聲清く
優しき情や通はする
薪こるとて木深きに
歌へば歌ふ山彦の
生ある者は近よらず
雲は扉す洞口に
毒があらぬか葉の形
不思議の草もありと知り
誰強ひざるに身自ら

木の片にかもならんずる

五塵を絶ちし境にて

行ひすます身ならねば

二十八宿、おごそかに

輝く宮を仰ぐよりも

地に人なきかさうくし

踏み出したる一步の

下り初めては山の水

溪の低きに落ちやすく

山淺うして炭竈の

人のけはひす薄烟

腰なる斧を鎌に代へ

山に茅萱を分けし手に

うまし稻刈る、秣刈る

里の訛言も聞きなれて

人に物言ひなつかしむ

或る夜、古老の物語

昔、郡司の娘にて

戀にはてたる一條

聞くに思はず涙てふ

あやしきもの湧出で

都の富士

新たに年の來るとて
清められたる都路に
朝の明空の晴れゆかば
小さき富士は現はれむ
巷の角を過ぎがてに
忘れしものを見る如く
扇かざしてたゆたひの
山は愛たき姿かな

手綱ひかえてふりかへる
 昔男が風流は
 武藏野ならぬ面影の
 駒を千代田に打たせたり
 さりとは急ぐ狼曳の
 急いで曲る後ろより
 鄙に候ふ萬歳の
 鼓は山の響なり
 天地初めの鎖めなる
 富士を遙に頂けば

よし人の子の造れるも
 都の幸は多からむ

吾心は暗し

吾心は暗し

君すみやかに琴立てし
其音を高くひびかせよ

絶えなんとする運糸の
希望の端をさぐらせて
高き響にさそひ出せ

樂師の君が手にこめし
つよき力にふれてこそ

涙は底にわきいつれ

軽き調子はわらは女の
快樂の夢にとまらむ

琴の緒しめて調べ昂げよ
荒野の胸に傳ふべく

萎める百合

茅萱の奥に山百合の
花はかすかに萎みけり

清き匂ひを胸に抱き
つひの永眠の美しくしき

花重げなる一本の
莖こそ細くゆらぐなれ

露の白さか白百合の

生れながらに萎めるよ

乾きやすかる朝の間を
山にみちたる夏の露

消ゆる生命の花の上に
たゞ一しづく滾れたる

姿くづさず世に醒めず
みそらの國によみかへれ

眠らしめよ

光は西に隠れたるを

神よ、睡眠を與へかし

夜の冠を吾に授け

霎時なりとも睡眠しめよ

白き羊を牧場に休め

主人は低き小舎に寝たり

吾やはらかに暖かき

衾の中に夢ならず

朝の光は明かに

吾くるしみを責め來る

夕、あやなき闇の奥

幻ありて吾に添ふ

安き睡眠を與へずば

神よ、胸刺す槍をたまへ

芙蓉の花は黄昏の

色美しくしく萎みたり

同じみそらを頂きて

夕を安くぬる

他は羊を野に飼ひて
祈禱の聲も短きに

雷鳥の歌

ふりにふりくる白雪は
群山秀れし頂上に
三冬眠る生物を
封じ籠めてもやむまじく

宙に碎けし白銀の
星の塵こそ地に積れ
帝座を降りし雷鳥は
眞白き鳥と變じけり

月の輪しるき荒熊も
恐れて洞を出でざるに
若き血、胸に温むる
鳥の柔毛は雪にして

根は岩に這ふ落葉松かしらの
瘠せて力のあらはれぬ
雷鳥、靈を傳へてか
冬の木、單り威を示す

六合凍れる息を吸ひ
双の翼をはたくと見れば

天に瀉捲く雪けぶり
氣象萬千白さに埋む

彼は家を失へり

人住まふとも思はれぬ

庇、柱、荒縄に

しばりつけたる假小屋の

彼は家を失へり

庭廣う住む里正の

離室建つと壊したる

紫蘇と葉蓼の裏畑に

彼は家を失へり

天に酒星のてるうちは

妻を据えず子を抱かず

地に酒泉の盡きざるに

彼は家を失へり

他の車に一筋の

綱をつけて酒に代へ

やぶれ疊にうたひたる

彼は家を失へり

自ら建てし假小屋に

月も雨も漏らば漏れ

夢は圓かに糸がさしを
彼は家を失へり

さらでも強き手力を
人にかりる迄もなく
くづれん小屋を壊されて
彼は家を失へり

詩 災

花外兄の新著『社会主義詩集』は發行を禁じられぬ、
詩災いたむべし

眼のかじやきにあふれたる
ほこり上なき詩人の
自然の聲を汚れたる
掌の上に誰か載せて

たゞ一聯の句なりとも
詩を滅す力あらば
潮は天にみなぎりて
神の怒りに屠られむ

汗の清水は野に流れ
労働の香は土に浸む
ひとり詩人の手控に
賤がいのは歌はれぬ

かゝる世にしも出でずんば
詩人いづれの世に出でむ
秋は朗らかに晴れたるを
恥らふ節もなかるらむ

茶汲女

十二社にて

茶汲女、興をたすけんと
池の緋鯉に糞を投げて
掌たゝくものごしの
こゝは都に遠からず

この子鄙路に家を持ち
母屋に鳩飼ふ過世ならば
訛語にはぢて積藁の
竈のかけにや隠れしを

藤山吹に行く春の

よきまらうどを送りても
瑞枝かけさすおばしまに
ふところ鏡さぐりみず

聲若うして鶯の

自ら野邊に捕はれむ

けなげや君は花の上に

羽づくろひして世に媚ひず

都少女がさゝめきの

もゝ囀りをよそにして

若葉のかげのさはやかに

襟くつろげて風に吹かるゝ

寺の鐘

夕、柩の寺に入れば
役僧法衣の袖をかゝげ
告ぐるが如く鐘をうちぬ
汝も終に來りしよと

終りの響長う曳いて
軒より軒につたひゆけば
假名の小唄を膝に投げて
若い子、艶に眉をひそむ

聞け、其ひびき、送り人の
門前市をなす時には
供養淋しき柩よりも
更に高さ響あるかを

聞け、其ひびき、文を読んで
功績たふふる聖ならば
罪の庭より來し者より
更にも高さ音あるかを

それ單調のひびきながら
廻廊くらし隅にかゝる

鐘はこれより音を知らず
汝も終に來りしよと

靈 芝

彼の天漢に流れたる
銀河の海に入る如く
地の八極に根ざしたる
雲をいたゞく高山の
天意を得しは自然なり
翼の者も近よらぬ
神ながらなる仙境に
一道の紫氣たなびきて
不斷に示す瑞相の

靈芝は草の類ならず

偶ま近く天樂の

空よりひびく聲ありて

諸天玉女は花を捧げ

甘露を盛れる杯を置き

供養極めてうやくし

まことや彌勒出てざれば

世に傳へざる經文の

一字に包む光明も

八紘九野を照らすべき

御經は此處に藏めたり

天地初發の象成りて

人の知根は定まらず

即ち雲の使者ありて

野に教へたる方便の

詩篇の意味は純なりき

西と東の大陸に

形を變へて別れたる

幾萬卷の文字は只

巷の上の信仰に

多くの神を呼べるのみ

靈芝、山上に驗ありて
天の供養は秘めたれど
たしかに存す經文は
樹下の思想を聲ながら
寫し置きたる句なるべし

夕立

杉葉立てたる又六が
うま酒かもす三輪の家に
國つみ神と山祇と
睦まじげなる夕涼み
すゝしのとばりかゝぐれば
南に高き山つゞき
松火の火をふりかざし
大和國原雨を乞ふ

飛鳥小町も時や非に
 古風の歌はすたれたれど
 猶しほらしき鄙よりは
 枕詞に残るかな
 流をせきて池をあけ
 水引くことに争そへど
 畠は黄み田はしをれ
 露置く迄に焼けはでむ
 國つみ神も山祇も
 一うるほひのあれかしと

雨に興ふる杯を
 溢れんばかり酌ぎ給ふ
 あやしき雲の高湧きて
 乙羽の山にかゝるよと
 見るく空はさわ立ちて
 夕立すなり十市高市

葛城の神

空ほがらかにあけゆけば
葛城山の木がくれに
醜き神はしづまりて
ふつに姿をあらはさず
夜は谷間にいましめの
七重の繩のからまりて
山氣に冷ゆる岩角に
貌好^なからぬをはぢたまふ

生るゝ上はとげ多き
野邊の薊とならんより
清らの花とにほひ出ば
愛ではやさるゝ幸あらむ

三十二相具へたる
天女の集ふ宮居にも
うかゞひやすき神なるを
如何に姿は授かりて

毛の物ねらう獵夫にすら
晝見られんをはゝかりて

雲の石橋かけもあへず
葛城山に神かくるらむ

三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

歌の故郷

畝火、南に尾を曳いて
香具山かすむ飛鳥路に
乾雲寒さきさらぎの
春は大和に入らんとす
笛奏しけむ國栖人は
尾花が下に消えぬれど
天と人とのなつかしみ
したしみ來にし道なれば

きよらなる子に行きあひて
名乗れと云ふもはどかりの
ちのづと山にぬかづきて
遠野の草の風を戀ふ

野は言ひ知らず淋しけど
藤原の人、まれくくに
十市の君に通ひけむ
水は流るゝ三輪初瀬

京より立ちて堂こもる
舞臺の欄の雲間より

四の姫、經をずべらせし
尾上の鐘の地にひゞく

天女の姿刻まれし
焚かばそらたき、名木の
活きてや残る若草に
ことなるかをり高踏まむ

こある、むらさき、春姫の
大和に舞ふを慕ひ來る
詩人繪匠伶人の
ふるさと圃め、曉のむら山

初めの謎

添寐の稚兒か夢にして
神の教ふるほゝゑみの
まだいわけなき頬の上に
戀の歴史は刻まれぬ

たゞ掌たなこにいつくしむ
愛の種子たねより培つちかひて
蒼よ花よとちのづから
高き香かそりを抱かしむ

戀の玉章、書かせじと
文字習はさぬ國はあれ
母が教ふる戀衣こゝろの
小袖の袂のかたちよき

奪はれ易く燃え易き
ハートの持てる傾向かたむきを
探るともなく汲みなれて
浮べる意味を母は讀む

膝に這ふ子の手を取りて
歩みの神は野に誘ふ

初めの謎を解きかねて
戀の稚兒こそ母に縋らぬ

刻める名

人は生れて呼名あり
神の與へし名ならぬを
歴史に刻み世に傳へ
高く永きを誇るかな

神は凡ての人の子に
勤務と罰と慰藉の
生活の糧は與ふれど
未だ其名は授けざり

見よ、秋清う晴れ渡る
 みそらの下の野邊にして
 水車下男と刻まれし
 其名を知らぬみ墓あり
 いか正しく美しく
 千載朽ちぬ名ならずや
 神こそ彼が生涯に
 ふさはしき名を與へたれ
 強ひて吾世を飾るべく
 とどき性質に鞭ちて

馬たほれたるしれ者の
 其名は石に深かるよ

野の歩み

歩みは土をはなれねど
うすものかゝる野の末を
空行く如く黄昏れて
途は小川に止まれり

斜めにゆるく高まりて
空をかざれる丘の上
浮べる雲の色彩に
八重の天路も遠からず

家の煩悶をさかり来て
羸^ろ腫^{しゅ}断^たれしうれしさに
孤^こ獨^ど行^ゆくなる淋^{しみ}しさも
野邊の歩みに忘れぬる

尾花は枯れて水に折れ
笹の葉黄^きむ岸にして
恐れ氣もなく星宮に
近づき得べき想像あり

冷たくなりし手をあて、
胸をさぐれば隠れたる

春の生氣のあたゝかく
吾は枯生の人ならず

眼は冥れるに遠耳の
微かにものゝ聞え來る

何處の母の子にやうたふ
聲は吾家の節に似て

吾かとはかり一步に

寂は破れてもとの野を

斯る分際にはあらぬ身の

呼び返さるゝ心かな

都に歸りて

胸苦しくもうなされて

ふと眼を覺す傍に

片頬かすめて幼兒の

夜半の寢息は静かなり

砧の歌を讀む頃に

故郷の家を辭し來れば

都の空は秋閑けて

袂被くも寒げなり

時に後るゝ山里に

留まれよとにあらねども

家族率てゆく旅なれば

さぞ係累の多からむ

と云ひて門に立ながら

見送られたる其時も

笑顔作りし幼児の

何とて夢に驚かむ

眼は内にみゆれども

枕静かに寝反りて

足ふみのばす破壁の
吾家の外に蟋蟀の鳴く

人 影

五つに六つに分れたる
都の巷まちの廣うして
往ゆさ來くるさの人影は
流るゝ如く眼をよぎる

これをすぶるに大いなる
生命いのちありとは神に聴く
たまゝものものに躓つまずいて
春衣はるぎの袴はかまに汗寒し

すれちがひさま行く人の
面の色はよみもせむ
自らむすぶ唇の
意味は浮べるまゝにして

靈たまのうごきの一步は
一步よりと移るらむ
言ふと言はぬの分ちにて
人は遠きに別れ去る

詩聖ダンテもパイロンも
昔、巷の人なりき

詩人らしきか瘦せし影
低き軒端に隠れけり

よねの小春も梅川も

巷の人か春雨の

傘が似たよな女傘

柳をわけてあと見えす

野に歸らんとしたりしを

筈に打たれ、つながれて

たどくしくも行く道に

會ふは會ひぬる人のみにして

巷の木枯

途にこぼれしパンの粉を

物惜む目にみかへりて

灯し頃をすれちがふ

人、木枯に吹かれ行く

歩みこそすれ行きくいて

何れは家につながらるゝ

夕の土産も足らぬけに

淋しき色の浮ぶ見ゆ

都、秀才の血を絞り
花やかなるは夕陽の
うるはし雲に似たれども
頓て消えゆく光かな

漂はさるゝうづまきに
強ひてあらがふ力なみ
今はすなほにうなだれて
我影のみを刻み去る

滅びしものは冬木立
枯しが如く寂たれど

あへぎ見るべく針端の
巷に高く時を指す

宵、吹きつゝのる木枯に
家はことごとく戸を閉ぢぬ
火を警むる木の音の
響くは町の遙かなり

消えんとすなる埋火を
かき起しつゝ、起しつゝ
何をか胸に問ひ應へ
裾冷ゆる夜を寐もやらぬ

さむ空

昨夜秋雨に風添ひて
都は早きさむ空に
早う起きたる家妻の
葛籠の底をかへす哉
物とくのふる巷にて
母に小さく負はれたる
唇寒き子が肩の
去年のシヨールの縫れたる

をんな十九の秋の暮
さむさ構へに製ね着る
襦袢のはしもさゝずして
其日の宿に逐はれ行く

秩父の山の翠にも
故郷遙かなる思ひして
人の都の人聲も
遠きに響くそよ風よ

花も褪せたる二重帯
隠すに見ゆる綻びの

只わけもなく悲くて
他の流行の眼に映る

寒さと饑に襲はれん
明日の恐慌も然りながら
裕せし衣の出来じとて
少女は道の陰に伏す

都はづれ

山ひらけたる武蔵野の
秋草にほふ野は盡きて
都に落つる關口の
水は木の根によどむかな

駒塚橋を徒歩にして
渡らふ人もまれく
八十の巷は一筋の
鄙の遠路につゞきたる

早稻田の稻のりつかの自ら

穂ほに現あらはるゝ才さいもなく

詩うたに瘦やせれても秋あきの野のの

草くさに捨すて行く調しらべのみ

首途あたまの占しるをあやまりて

歩あしは都門みやとに馳はせられた

後あとれし性せいに鞭むちたば

日ひの落おちざるに倒たれなむ

ものものに焦これば夕雲ゆふぐもの

燃もゆるが如ごとく燃もえながら

何を夢ゆめみて覺おめし如ごとく
冷ひやたき石いしを抱かかくらむ

掃はへば落おれん蜘蛛くもの圍かこひ

秋あきの一ひと葉はと繫つがれて

翻ひりゆくかたもなく

其その日ひの空そらにかゝづらふ

下した這はふ蔓つたは地ちに伸のびて

小こ草くさ隠かくれに實みはなりぬ

鄙しづと都みやとの界路さかみちを

水みづは静しづかに流ながれたり

晴れたる家

朝の緑に眼はさめて
寐ながら仰ぐ雲の色
晴れたる家に住みならひ
都去らんとも思はずに

高き誇りと感興を
勤めの上に捧げつゝ
時代の流れに吾影の
映るが儘に映し去る

小暗き家に育てられ
壁と壁との間より
るゝ光の僅なる
慰藉にこそ生きたしか

一の親族の可と言へ
否とも思へ、故郷ならぬ
家をつくるに身を置くに
晴たる空を戀ひしのみ

幾蹉躑をふりかへる
路は細くも一筋の

吾爲めにしも拓かれて
遅きながらに歩み來ぬ

抑へられたる空想の
翼翔らば翔るべし

冷えんとしたる熱情の
泉湧きなば湧きぬべし

詩に老いざるを生命にて
女三人みたりを持つと云ふ
或る夜の占は運命の
たのみ強かる星に任さむ

斯る人に

向ひてあれど影の如
君ありとしも思はねば
只埋火をかき起し
獨の興に似たる哉

何か言ひしと面あげて
見れども君は俛首うつむきて
微笑むのみに應へなく
眼は燈火を放れたり

たゝかひ疲れ歸りたる
主人は晝をかへりみて
今静かなるいさゝ井の
もとに返りて底澄みぬ

世なれぬ人の歩みぶり
前危うげに開ゆれど
燃ゆるが如き青春の
一言、感に迫る哉

香を抱く森の木
世の手力に抑へられ

曲るに未だ年若く
みづくしくも伸びんとす

木地に鑿する荒彫の
艶も飾りもかけざれど
語るに會ふにみざめせぬ
君は昔の詩に似たり

今めく才に迸しる
言のかしこき鋭きは
あひしらふにも眩ゆさの
拙ささがや堪へ難き

萩の若葉

昨日か刈りし枯莖の
垣根の土を濕して
卯花くだしふるなべに
萩は若葉となりにけり
丈にのびてはなよくと
柔かき葉をひらきゆく
これの力はふしてみる
人の眼もとどかじよ

花よりさきにうつろはん
都に占めし宿ながら
暮れゆく春に秋草の
秋咲く苗をいつくしむ

尾花葛花七草の
武藏は露の野邊と云ふ
なに、歌おもふ隠れ家に
養はれんと願ふらむ

こゝらの花は根にかへり
新樹の蔭の青む日に

古き樂書を讀みさして
晝倦じたる片庇

名のみ坪に下り立ちて
ふるゝともなき萩の葉の
若きしなひのあをくくと
いとしきものに思ふかな

さくら

春風しゅんぷう一夜、二十四の

花の蒼を吹き開き

朝あさ、櫻の輝きに

人は驚く都かな

煤の烟に町妻の

衿の白きは垢染めど

咲いて櫻の白かるは

山なる木にも耻ぢざらむ

櫻の盛り世の盛り
 都は人の盛りにて
 天才、地才、網を解き
 時の潮に乗らんとす
 雲に浮べる春光の
 金鞭、揚げて駈り來る
 駒の響きに地なる花
 櫻、蓮翹、あわたし
 希望、歡樂、圓滿の
 聲は櫻に埋もれて

捧げ出てたる春姫の
 香かきの甕は今か満つらむ

母が奏づる

味の神や醸したる
甘き乳房にすがりつゝ
ぬば玉の夜をいをやすく
母に添寝の寝顔こそ
罪の衣を纏はざる
生れしまゝの姿なれ

明け放れゆく巷には
物の響、人の聲
只、此稚子の枕邊に

今日は来らず驚かず
睡眠を許さぬ光さへ
險の上にするのみ

朝、静かなる次の室に
母が奏づる風琴の
響かすかに眼を開き
聞くこと知らぬ嬰兒も
自らなる音に醒めて
首、擡ぐる調べかな
厚き衾を吾占めて

小さき王はめざめたり
 母が膝こそ嬰兒が
 他に譲らぬ位なれ
 むべ寐る間も心ある
 樂師となりて護りけむ
 葉に隠れたる梅の實の
 落ちて青きを知る如く
 誰か梢を仰ぎ見て
 木の實の熟むを想はざる
 育てよ、神は味の
 乳房を母に給ひしを

内裡雛

男雛たゞしき居ずまひに
 おほとのごもり渡らせず
 女雛若うて白き面
 闇に怖ぢたる春の夜を
 小鼠走せてさかしげに
 御衣の端を齒に咬へ
 壇より下したてまつる
 女雛のみ手に尾の觸れて
 あなやと強く振放す

鼠さわがず菱の餅を
さらへてこそは歸りけれ

事ありけりと男雛
悠々として出てたまふ
後ろうかゞふ早業の
抱きすくめし羽がひじめ
物の怪、まろを捉へぬと
玉のみこ糸の朗らなるに
とものみ奴御階をよぢ
逆髻あげて心得貌
さくら橋山吹の

殿上、花の嵐なり

樂を停めて静かなる
五人囃子はいとまあれや
居眠りさめて怠りの
調や召すと打ち出す
鼓の音窸々たり

夢破られて雛の主
童女七つ燭を取り
かしこき眼、疑ひの
さなり女雛に力添へん

逃しはやらじと男雛の
御手を取りて据ゑまつる
夜のおとこの雪洞に
灯ひともして置く春の宵

林檎を植うる歌

植ゑよ、植ゑよ、林檎の木
土のかたきを鋤き返し
根を柔かに休むべく
臥床ねどをつくれ永久の
夢しづかなる搖籃に
稚子の衾をかづくごと

二

植ゑよ、植ゑよ、林檎の木

小枝々々に蒼もちて

幹や、高うもたけぬれば

牧場の草にてりかへす

夏の日、風と木かけあり

かさなり茂るみどり葉に

胸毛の色の真紅なる

鶉アヒ、其巢をかくすべく

三

植ゑよ、植ゑよ、りんごの木

蜂は重げに花に入り

蝶はかるげに花を出づ

病を抱く少女子の

五月、倦じて肱を曲ぐる

小窓垂れたる素絹ヒメに

林檎の花の香をこめて

風は翼をうち羽ぶる

四

植ゑよ、植ゑよ、林檎の木
夏より秋にふくらみて
九月の空のたかき時
實は色づきて地に落ちむ
草にまろびて隠れしを
かささぐりゆく楽しみは
ひなしき籠に溢れたり

五

りんご、りんご、りんごの實
木枯吹いてあか星の
光も慄ふ冬の夜に
折たく柴の爐のほとり
物語聞くわらは女の
眸を膝にそくぎつゝ
静かに剝くは何の實ぞ

里司どるよき家に
まれ人招くともし火の
卓、堆うつまれたる
木の實に映えて形よく
色美しくしきは何の實ぞ

六

りんご、りんご、林檎の實
吾波戸場より八百潮の
知らぬ港にはこばれて

味ひ得たる里の子に
温室、花の甘きごと
國の遠きは隔たれど
森のにほひを想はしむ

よその濱邊にうらぶれて
吾ふるさとを忘れたる
さすらひ人の手にゆかば
美しき實をかさいだき
暫しは歸るいにしへの
夢のこかげに戯れむ

りんご、りんご、りんごの木
『時』に不斷の力あり
地に何物かほろびざる
幹はむしばみ葉は落ちて
花もかへらずなりし時

りんご、りんご、林檎の木
僅に残る切株に
腰を掛たるわかもの
問にいらへて、ある昔
林檎をこゝに植うるとて
誰そや歌ひし歌もありしと
教ふる人のありやあらずや

行く春の海邊に立ちて

天の工匠が造りたる
岩楠船や浮べけむ
其代のまゝに波打ちて
神馬藻寄する大和田の
千歳を經りし故郷に
我や在りしとばかりにて
さまよひ歸る汀かな
海の上より行く春の
花の白帆は東風に

吹送られて常春の
沖津島根に歸るらむ
好き樂人の座をすべり
弓を收めて去るが如
底惜まるゝ想あり

姫なる神の月天子
みむねを人にはからせて
干満潮に光あり
眞砂の粒の小さきにも
注ぐ涙のあればこそ
蜚が子等にも拾はるゝ

詩は貝殻に似たりけれ

翁さびして漁夫か

晴るゝ曇るを行く雲の

夕占に創め教へたる

鞭の行方を自得て

僅に水夫がだみ聲を

八百重の潮に恐れなく

放つばかりの我詩よ

半は砂に埋もれて

錆びに錆びたる捨礎

千尋の底に投げられて
千石積める親船を
ゆたに泊たる爪はあれ
春の風吹く陸の上に
荒男のはての静かなる

網を断たれし礎こそ

さぞ荒海を慕ふらめ

かへれ、かへれ、渡津海に

汝が力の減ぶまで

畝うつ浪の底にあれ

巷に狂ふ詩人は

衣裂けても怖ぢざるに

風は南に吹和ぎて

雲は落ちけり水のはて

不易の天を頂きて

身は幾度も同じ世に

詩を生命の水馴棹

こゝらの珠を探りつゝ

底なき海に想像の

龍の手函や開かなむ

又來ん世にも來ん世にも

七ます星の夕されば

船路の北を指す如く

高く清さに導かむ

今、我こゝに享け得たる

百歳足らぬうたかたの

若き齡を數へんや

草には若葉、木には實の

和子を殘して行く春の

船出の歌に追憶ある

昔の我に返されて

面影うかぶ蜃氣樓

これや繼目を忘れたる
繪卷を歩む汀かな

明治三十八年六月廿日印刷
明治三十八年六月四日發行

塔影奥附
金四十五錢



著者 河井幸三郎
發行者 金尾種次郎
印刷者 佐久間衛治
印刷所 株式會社 秀英會
東京市京橋區西船場町廿六七番地

發兌元
發賣元

東京市神田區西今川町二番地
金尾文淵堂
大阪市東區南本町坐摩前南入
杉本書店

目書版藏堂淵文尾金

オーキンミラー共著
野口米次郎共著
幸田露伴序歌 訂装
鹿子木孟郎書 美麗 金四十錢
郵税四錢

劍と戀の日本

加州オランダの高丘に退隱せる大詩人、先
生は戦時日本風の愛して其保護者として居る今
日の作家を以て野口氏に贈る所を以て野口
氏の作を交ふ新著、野口氏に贈る所を以て野口
少島の一章は新著、野口氏に贈る所を以て野口
に唱ふる一章は新著、野口氏に贈る所を以て野口

大壺 大鋼平 倉木福訂ス
坂等 桃清百 装綴
朝當 郎方穂 (口本美綴)
日撰 著書畫
懸小 著書畫
賞說 著書畫
金郵 六拾八錢
一度紙上に登載せられて其妙を賞せられ東西
二十有餘の劇場に演ぜられて益々其美を知ら
しめたる者は、これなり作者今や滿洲に軍に從
ひ朝鮮の事に忙しく而して作者の心程の妙想
は内地にありて其精華を開けり激越なる琵琶
歌の綿々として全篇の骨子となり頁々に根性
の爆裂といはれし男と女の如き令嬢の美し
き心と如何に相對せるかを見よ

塔影

河井醉茗著 長原止水表紙畫 三宅克己口繪
製本本綴 口繪奉書摺
體裁瀟洒、四六版二百頁
定價四十五錢、郵税六錢

▲一部詩集をすくこと能はざるは人生の最大不幸
なり、山なる間は大氣に養はれ、人の胸は詩に養はる
詩集「塔影」は河井醉茗氏が最近三年來の傑作五十一篇
より成る、清高純潔、若くは一點の暇味なし、偶ま花やかに語
る人は、毎に花やかなる人、眩惑せしむるに止まる。「塔影」は
文字は、又一時、人を眩惑せしむるに止まる。「塔影」は
詩集なり、以て讀者の胸に接す、少くとも飽くことなき

目書版藏堂淵文尾金

中村春雨著 金七十錢 郵税八錢
密航婦 釘装クロス綴美装

西比利亞の内地に露人と其足跡を同ふしたる
我國密航婦の狀態は如何なりしぞ、媚を萬人に
賣る白粉の下にも隠れたる涙の疵は幾何男は
浮氣とのみ思ひて調情に身を任せたるものが
感じ得たる最後の戀の美しさは荒野に咲ける
撫子とも見るべからむ

中村春雨著 金十七錢 郵税八錢
無花果 装綴美装

往年大阪毎日新聞が金五百圓の懸賞小説を募集したる際坪内博士、
幸田露伴、故尾崎紅葉三先生の審査に依り第一等に當選したるは即
ち春雨氏の無花果にして、當時の文壇を騒がし、世人無花果を手に
し、エミヤ夫人を口にしざるものなかりき、爾來幾歳、版を重ねる
と九度、發賣部數幾萬たるを不知、實に明治小説界の異彩なりとす、
久しく版絶へて江湖の需に應ずると不能りしに、漸く釘装美装を極
めて第九版は成れり、夫れ無花果は在來の陳腐なる舊套を脱して材
を宗教に執り、信仰と人情の衝突、家庭と社會の撞着より生ずるあ
らゆる悲劇が、其厚珠の如き女主人公の温情と及び希望と良心の復
活とに依りて遂に和氣蕩々たる樂天地となりゆく光明小説にして、
同時に家庭に於ける其好なる讀みもの也、世の子弟も讀むべく教育
家も共に熟讀を價するものなり

中村春雨著 金四十五錢 郵税八錢
雛鳩

丁蘭益會。吾林。雜り種。片男涙。道羽子。
けふ一日。もつれ。祭。白妙。嬌。娘。氣。
實。癡。村。落。給。留。哲。學。ち。ざ。れ。文。天。神。橋。
自然。詩。人。尼。の。ゆ。へ。つ。づ。れ。の。錦。浮。沈。
月の船歌。二木松城。鐵道馬車。妹山。鐵脈。
以上二十有餘の短篇小説を收む皆是れ小な
りと雖もタイヤモンドの如き質きもののみ

目書版藏堂淵文尾金

梶田半古作

繪葉書源氏物語

空前の壯麗

繪葉書界

五十四帖五十四枚壹組

空前の大作

桐箱入解説書
及源語繪葉帖附
(近日刊行)

新海竹太郎作

繪葉書十貳文豪

追次刊行

第一 以下近刊

シルレル 壹百年祭紀念刊行

シルレル

一枚各金拾錢 郵税貳錢

目書版藏堂淵文尾金

新體詩繪葉書

追次刊行 一組六枚

金三十五錢 郵税二錢

第一 島崎藤村
第二 薄田泣菫
第三 土井晩翠
第四 兒玉花外
第五 蒲原有明
第六 河井醉茗
第七 高安月郊

和田英作合作
滿谷國四郎合作
小林萬吾合作
岡田三郎助合作
青木繁合作
鏑木清方合作
鏑木孟郎合作
鹿子木孟郎合作

そのおもかげ
戀六種
花ふき

短歌繪葉書

追次刊行 一組六枚

金三十五錢 郵税二錢

第一 與謝野晶子
第二 與謝野鐵幹
第三 佐々木信綱
第四 尾上柴舟
第五 金子薫園

藤島武二合作
中澤弘光合作
三宅克巳合作
長原止水合作
梶田半古合作

みだれ髪
むらさき

目書版藏堂淵文尾金

須藤南翠	小間	一	髮	(近刊)	金七十錢 郵稅八錢
綱島梁川	病	間	錄	(近刊)	金卅四錢 郵稅八錢
卅八年度	太平洋畫會畫集			(近刊)	金六十錢 郵稅四錢
小林萬吾	風景水彩畫帖			(近刊)	金六十錢 郵稅四錢
小林萬吾	人物水彩畫帖			(近刊)	金六十錢 郵稅四錢
新式美麗	新案おもちゃ箱			(近刊)	金五十錢 郵稅四錢
西村秋亭	繪葉書植物園			(近刊)	金四十錢 郵稅四錢
岡吉枝	繪葉書花の精			(近刊)	金卅五錢 郵稅二錢